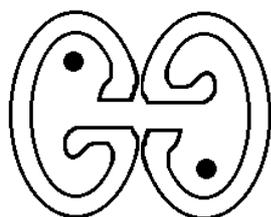


## 日本双生児研究学会ニュースレター



《第47号》

Newsletter of Japan Society for Twin Studies

2010年7月発行

## 目次

第1回日本双生児研究学会奨励賞受賞講演（改題）	2
「心身二元論医学を超えて」	
加藤 憲司（千里金蘭大学看護学部）	
日本双生児研究学会第30回研究会講演記録	3
「中・高校生期6ヶ年における双生児の体格，体力・運動能力の発育・発達」	
福島 昌子（東京大学教育学部附属中等教育学校）	
「多胎出産の現状～妊産婦の観点から～」	9
齋藤 令子（ツインマザーズクラブ）	
学会参加報告	14
「The 40 <sup>th</sup> Annual Meeting of Behavior Genetics Association に参加して」	
敷島 千鶴（慶應義塾大学先端研究センター）	
「The 13 <sup>th</sup> International Congress on Twin Studies の参加報告」	
西原 玲子（大阪大学医学系研究科保健学専攻）	
論文・抄録紹介	18
書評	21
日本双生児研究学会総会・幹事会報告	22
平成22年度日本双生児研究学会奨励賞授賞候補者推薦方法について	25
日本双生児研究学会第24回学術講演会のご案内	26
エリザベス・ブライアン先生追悼記事・編集後記	28

## 会員募集のお知らせ

入会を希望される方は郵便振替用紙に口座番号(00910-2-253840)、加入者名(日本双生児研究学会)をご記入の上、年会費(3,000円)をご送金下さい。また、通信欄に所属・所属の住所・電話番号・FAX番号・E-mail等をお書き添え下さい。

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-7

大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻

日本双生児研究学会事務局(早川和生)

TEL &amp; FAX: 06-6879-2550

E-mail: hayakawa@sahs.med.osaka-u.ac.jp

<http://sahsweb.med.osaka-u.ac.jp/~jsts/index.html>

# 日本双生児研究学会奨励賞受賞講演（改題）

## 心身二元論医学を超えて

加藤 憲司（千里金蘭大学看護学部）

このたびは本学会奨励賞の第1回受賞者にお選びくださり、誠に光栄に存じます。本稿は、2010年1月23日に金沢市で行われた本学会学術講演会における受賞講演の内容に加筆修正したものです。



筆者は本稿を脱稿する直前の6月26～27日に、仙台市において第51回日本心身医学会学術講演会に参加した。そこではGCOE合同シンポジウムと銘打って、「医学・生物学これからの50年の大問題：心脳問題をいかに解明してゆくか」と題したセッションが行われた。「50年の大問題」とぶち上げているのだから、未来の医学・生物学が目指す方向に関する本質的かつ包括的な討論が為されるものと期待しながら、筆者は檀上を見つめていた。しかし話の内容はかいつまんで言えば、「脳と脳以外の臓器（例えば腸）は分子レベルでどのようにコミュニケーションし影響し合っているか」という、この学会ではすでに議論され続けてきたものでしかなかった。なぜ心脳問題が「大問題」なのかという共通認識すら、演者らの間には存在しないかのようであった。

そもそも心脳問題は50年どころか、2千数百年以上にわたって人類史の中で議論されてきた、いわば「究極の大問題」であることは、賢明なる読者諸兄姉には先刻ご承知のことと思う。プラトンの『パイドン』に描かれたソクラテスの獄中での言葉によると、彼がなぜ牢獄に入ることになったのかをある種の人々は「骨と腱の運動」で説明するだろうが、本当の原因は、アテナイ人が彼に有罪判決を下し、彼がそれを受け入れたことである、というパラドックスが述べられている（プラトン『パイドン — 魂の不死について』 岩田靖夫訳 岩波文庫 1998 pp.126-127）。ここで「骨と腱の運動」を「ニューロン（神経細胞）内の分子の運動」に置き換えてみれば、現代の脳科学がその運動をどれほど詳細に記述できるようになろうと、ソクラテスのパラドックスから一歩も抜け出せないと言わざるを得まい。

このねじれを生きた象徴的な人物として、デカルトが挙げられる。彼の『人間論（宇宙論）』（伊東俊太郎・塩川徹也訳 デカルト著作集4 白水社 1973）は、自然学者デカルトと哲学者デカルトが対決する様子が見て取れる。自然学者デカルトは世界を物質とその運動に還元して捉える一方、哲学者デカルトはそうした認識の確実さは突き詰めると *cogito ergo sum*（考える私が存在すること）によって保証されていると考えた。そして人間体内には精神精気という粒子が流れていて、これが脳の中心にある松果腺を動かしたり、また松果腺から流れ出る精神精気が各種の神経へ流れ込むことで心の様々な働きが生じる、との説を唱えた。つまり、松果腺において身体と心は相互作用する、というのである。ここで現代の脳科学者がデカルトの「無知」を笑い、「松果腺」や「精神精気」を「ニューロンの発火」や「ニューロンネットワークの状態遷移」といった言葉で「訂正」したとしても、言い換えれば、現代人が脳の解剖学的事実や生理学的事実についてデカルトより多くのことを知っているとしても、それでは人間の心について我々はデカルトの省察からどれほど先に進んでいるのか、が問われなければならない。いやそれどころか、二元論のねじれと正面から向き

合おうとしたデカルトの自然科学者としての側面だけを受け継ぎ、要素還元主義的自然観を絶対視したまま、現代科学はそのねじれを省みようとして来なかった点で、現代人はデカルトの設定した舞台の上でいまだに踊っているにすぎないのではないか。

とは言え、デカルト以来の自然科学が哲学的議論を無視してきたことへの反省が、精神医学・心身医学の分野で言及され始めているのも確かである。例えば Kendler らは DSM（精神科診断分類）第 5 版改訂に向けて、哲学的課題を俎上に載せるべきであると米国精神医学会誌の Editorial で主張している（Kendler K et al. *Am J Psychiatry*. 2008;165:174-175）。冒頭に述べたシンポジウムも、クオリティ的には不十分なが、そうした流れを汲んでの試みと評価することもできよう。筆者も遅れ馳せながら、「複雑なものは要素に分解すればわかる」「目に見えないものは見えるようにすればわかる（見えないもの、検知できないものは無視する）」といった単純な自然観・人間観に対して問題意識を持ち、それを研究に反映させられないか暗中模索している。もちろん、今回の奨励賞受賞がそうした「大問題」に挑もうとする筆者を激励してくれたことは言うまでもない。



興味を持たれた読者は、本学会ニュースレター第 43 号（2008 年 8 月発行）の『見えない病気をさぐる』および本号に掲載されている論文抄録（Kato et al. *J Psychosom Res*. 2010;68:447-453）も併せてお読みいただければ幸いです。

## 日本双生児研究学会第 30 回研究会講演記録

### 「中・高校生期 6 ヶ年における双生児の体格、 体力・運動能力の発育・発達」

福島 昌子（東京大学教育学部附属中等教育学校）

#### I. はじめに

中学・高校生期は心身の発達の最も顕著な時期であり、子どもから大人への過渡期でもある。身長伸びは、女子では小学校高学年、男子では中学生期にピークをむかえ、その後も発育を続け、高校生期にかけてほぼ成人の身長水準に達するといわれる。身長の発育が盛んな時期には、成長ホルモンの分泌も盛んとなり、身体諸器官の発達を促し、二次性徴や性成熟にかかわる性ホルモンの分泌の増加も心身の発達に大きな影響を及ぼしている。

この時期は、体力・運動能力が最も著しく発達し、運動実施の効果も大きくなる。特に中学生期は、男女ともに呼吸循環機能の指標とされる最大酸素摂取量の増加が顕著となるが、これは、運動実施の影響が強く反映しているためである。中学生期では、姿勢保持や持久的運動で主動的な役割を果たす遅筋線維の発達に加え、強い瞬発的なパワー発揮にかかわる速筋線維の発達も顕著になり、素早く力強い動きをする能力が高まる時期でもある。男子では高校生期にかけて、筋力・筋パワー（瞬

発力)の発揮能力は高まるが、女子では一般に高校生期後半で、筋パワー(瞬発力)の発達速度に減速傾向が見られるようになる。

このような思春期スパート時の双生児の子どものたちの身体の発育・発達の様子が、どのような位置にあるのかを調べた研究はそう多くないといえる。そこで本研究では、思春期の双生児の子どもたちの体格、体力・運動能力の発育・発達の現状を、9年間にわたり蓄積してきた東大附属生の新スポーツテストの測定データから分析し、どのような傾向にあるかを明らかにするものとする。

#### <本研究における思春期の定義>

WHO(1989)によれば、「思春期とは子どもから大人になる間の身体的・精神的・社会的に成熟する期間であり、身体的には二次性徴の出現から性成熟までの段階である」としている。立花(2001)によれば、Tanner(1962)の二次性徴の成熟度評価法によるイギリス人小児の二次性徴発現時期(Marshall and Tanner, 1960, 1970)と日本人小児の二次性徴発現平均年齢(Masuo, 1993)の比較から、日本人小児における身体的思春期は平均的には男性で11~15.5歳、女性で10~14歳にあたるとしている。中等教育課程はその時期と重なる部分が大いいため、本研究では思春期を広く捉え、測定対象者を思春期男女とした。

## II. 方法 (Methods)

### <測定対象者、及び測定方法の概要>

#### 1. データベースの特徴

本研究では東京大学教育学部附属中等教育学校(以下:東大附属)の4月から5月の体育授業時において測定された新スポーツテストのデータベースを使用した。東大附属では、生徒に対し6年間の縦断的な運動パフォーマンステストおよび形態計測を41年前から今日に至るまで継続して行っている。そのデータの特徴は、6年間の縦断的観察が可能なこと、各項目の記録が個人レベルで対応がつくということである。また、現在実施されている新スポーツテスト、および生活習慣に対する意識調査は、文部科学省体力診断テスト改定以降10年間の縦断的計測がなされている。したがって、本研究ではこれにより前述の目的に接近することができると考えられる。また東大附属は、昭和23年(1948年)からしばらくは一般児学級と双生児学級(双生児のみの学級)が開設されていたが、現在においては一般児と混合で双生児のみの学級は存在していない、それ以来、毎年10組前後の双生児と、約100人の一般児が入学し、中・高の一貫教育(現在は、中等教育学校)のもとで学習が行われている。

#### 2. 測定対象者(データ解析対象者)と比較対照群

対象者は2001年度から2009年度に在籍した双生児男女(男子双生児357名、女子602名)合計957名を対象者とした。その比較対照群として、2001年度から2009年度まで在籍をした前期課程1年生から後期課程6年生(中学1年生から高校3年生に相当)までの生徒男女延べ6,100名と、2000年度から2008年度文部科学省調査「体格調査結果」、「体力・運動能力調査結果」の全国中・高校生男女約合計149,567名(男子74,908名、女子74,659名)とした。

また、ここで述べる東大附属の資料は、2001年度から2009年度の在籍者を対象としているため、完全な横断データではなく、複数の年月齢で同一個人のデータが利用されるということを述べておく。

(注)文部科学省調べによると、全国平均基準値は、毎年、全国都道府県より新スポーツテストを実施している各県中学・高校より各3校を無作為に抽出し、その中から各学年男女8名を抽出した児童・生徒を対象に統計処理を行っている。

### 3. 測定項目および測定方法

測定：文部科学省「新スポーツテスト」

測定項目：(A) 身体形態（体格）

身長，体重，座高

(B) 身体機能（体力・運動能力）

走力（50M 走），全身持久力（持久走＜女 1000M・男 1500M＞），瞬発力（垂直とび），跳躍力（立ち幅とび），柔軟性（長座体前屈），敏捷性（反復横跳び），筋力（握力），筋持久力（上体起こし），投力（ハンドボール投げ）

#### <解析方法>

全国平均値と東大附属生との比較では，文部科学省の 2000 年度から 2008 年度体格調査結果（平均値）と体力・運動能力調査結果（平均値）を基準値とした。解析方法としては，既知の母平均と標本平均の差を標準誤差で標準化し統計量を求め，標準正規分布を利用して検定を行った。また双生児の平均の全国の分布における相対的位置を明らかにするために，全国の平均を用いて，正規化したTスコアを求めた。

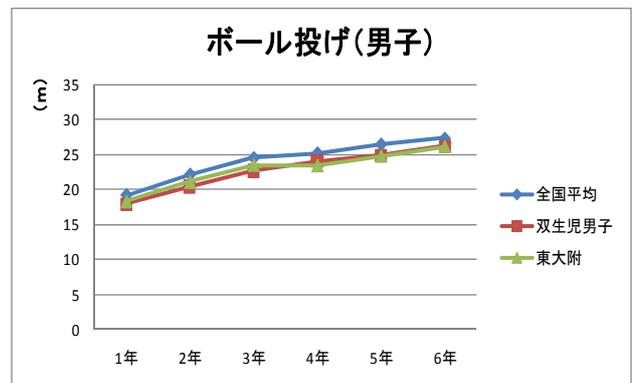
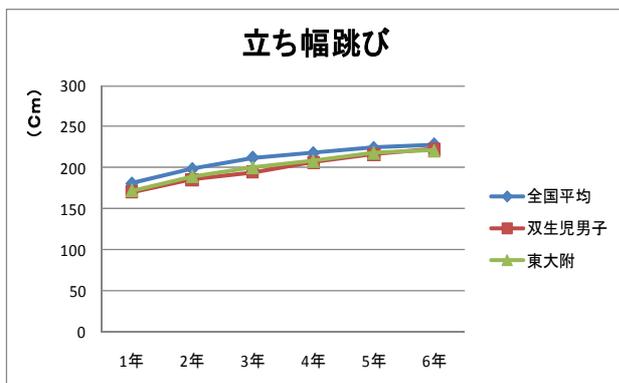
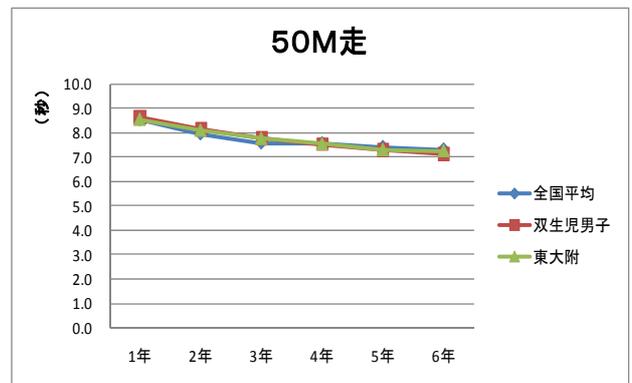
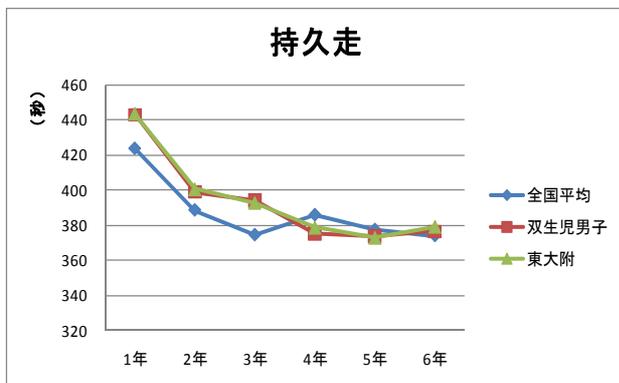
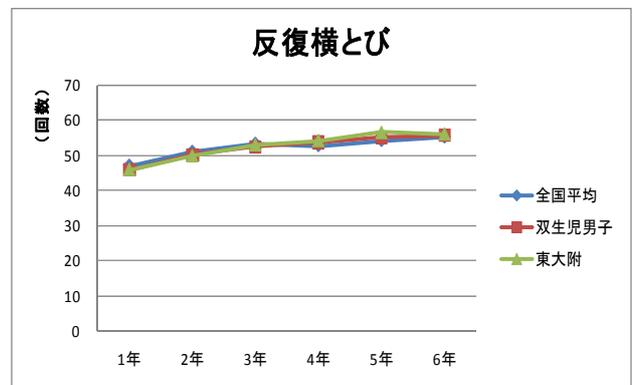
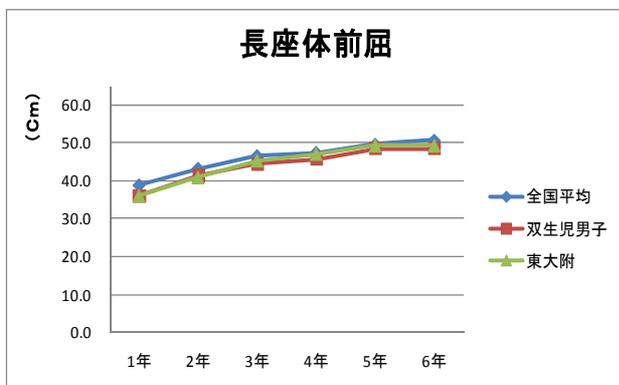
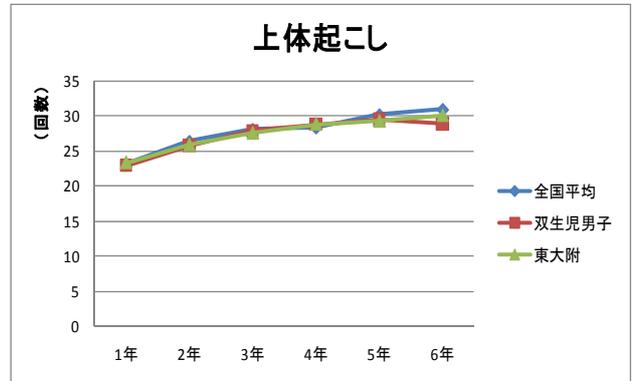
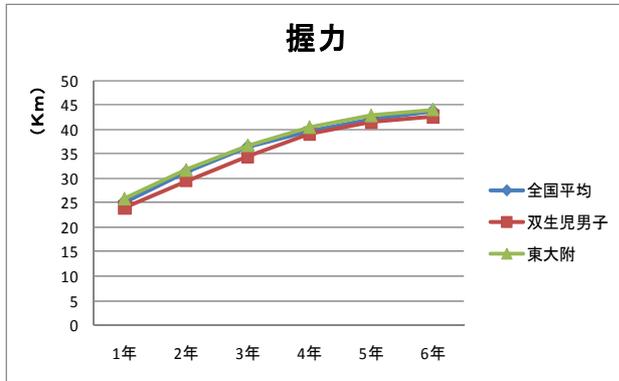
### IV. 結果と考察

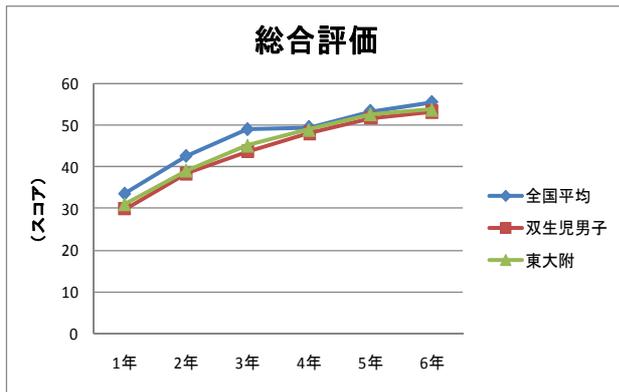
全国平均値と東大附生の体格，体力・運動能力測定平均値の差を検定した結果から，双生児男子については，体格では身長，体重ともに全国平均値より低い成長曲線の傾向を示した。双生児女子については，身長は全国平均値と一致した成長曲線を示したが，体重においては男子同様に全国平均値よりも低い成長曲線の傾向を示した。

体力・運動能力については，双生児男子は，入学時は長座体前屈，持久走に全国平均値に比べ有意に低い傾向にあるが，2 年時から全国平均と差がなくなり全国平均値と同様の結果となった。握力，上体起こし，反復横とびでは，6 年間をとおして全国平均値とほぼ同様の結果であった。しかし，立ち幅跳び，ボール投げに関しては 6 年間にわたり，全学年において有意に低い，また低い傾向にあるという結果であった。これは，双生児男子に限らず，東大附属生の男子にも同様の傾向が見られているため，双生児であるからとは一概にいえぬものがある。また，総合評価においては前期課程の 3 年間で有意に低く，後期課程 4.5.6 年生になると全国平均とほぼ同等の基準値になるという結果が得られた。双生児女子については，前期課程入学時に 50M 走において，全国平均値より有意に高い傾向にあり，その他の握力，上体起こし，長座体前屈，反復横とび，持久走などは，全国平均値とほぼ変わらない結果であった。その中でも 50M 走や持久走は，後期課程 4 年生から成績が向上し，全国平均および東大附属の女子生徒よりも有意に高い状況にあった。しかし，立ち幅跳び，ボール投げは，男子と共通してほぼ 6 年間にわたり有意に低い結果にあった。総合評価では男子の傾向と異なり，前期課程から後期課程の 6 年間を通して，全国平均と同様の基準値にあり，特に双生児女子においては東大附属生より，優位な成績結果が得られている。男女共通していえることは，上体起こし，長座体前屈，反復横とび，持久走，50M 走においては，前期課程では全国平均と同様の基準値にあるのに対し，後期課程 4 年生になると，全国平均値より有意に高くなるという結果が得られた。しかし，ボール投げでは，6 年間にわたり全国平均値より有意に低いという結果であった。これは東大附属は六ヶ年一貫教育を行っているため，受験がなく部活動も継続して行われているため，他の中学生，高校生とは異なり，発育・発達の過渡期に継続して運動を行うことができているからではないかといえる。そのため，健康を維持，増進させるために効率よく体力・運動能力を高めることができたのではないかと推測される。これは，双生児の子どもたちだけでは

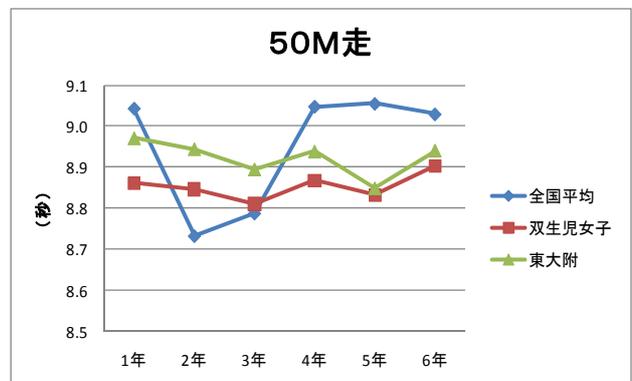
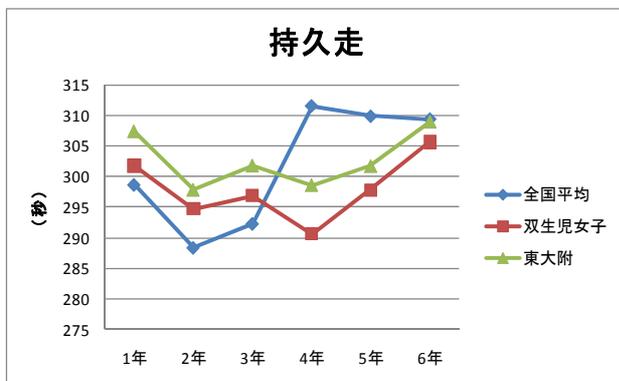
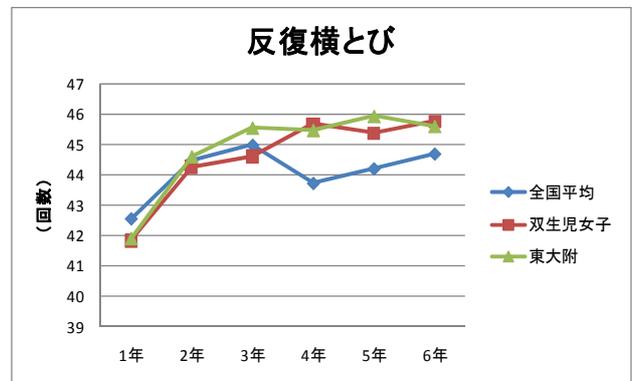
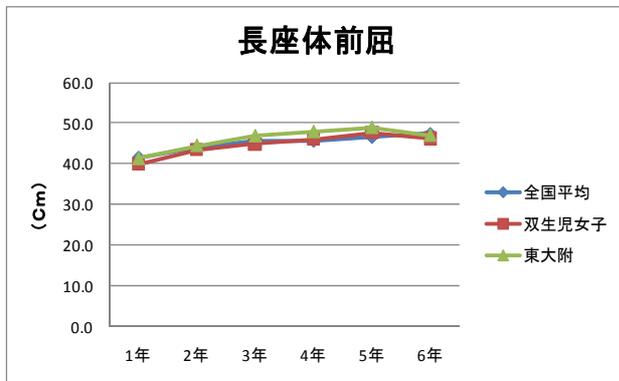
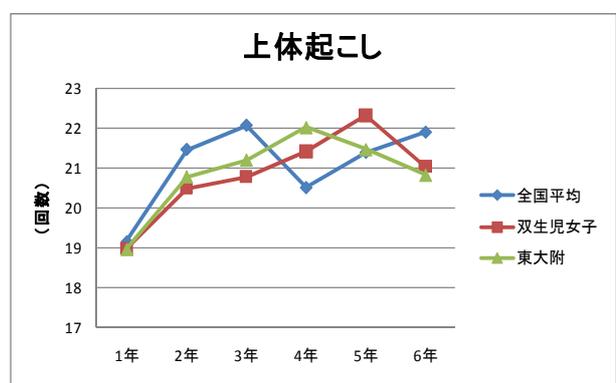
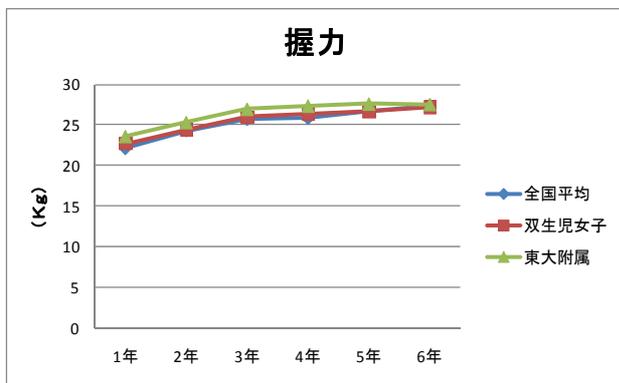
なく、東大附属生にも同様の結果が得られている。

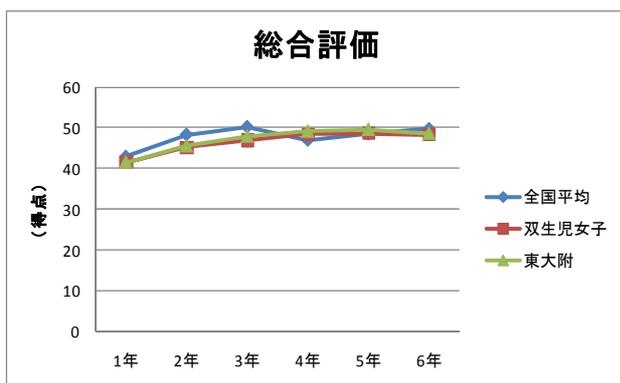
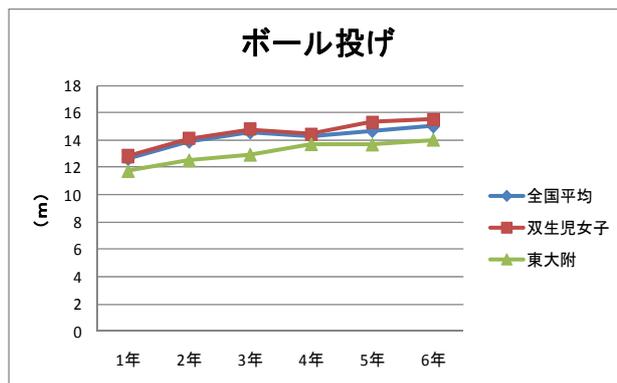
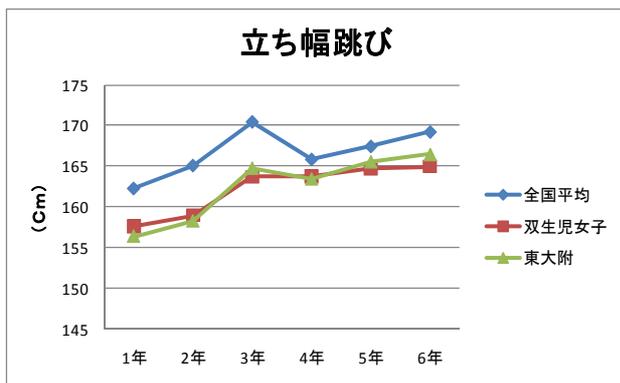
### スポーツテスト結果の全国平均と双生児男子、東大附属男子との比較(2001～2009年度)





## 2001～2009年スポーツテスト全国平均と双生児女子、東大附属女子との比較





## まとめ

学校の健康診断において、児童生徒の体格は向上しているものの、ここ約 30 年間にわたり体力・運動能力については逆に低下する傾向が指摘されていると先にも述べた。そこで本研究では、低下傾向にある中で、思春期スパートにある双生児の体格、体力・運動能力が、同年代の子どもと比べ、どの範囲にあるのかを、これまでに蓄積してきた 9 年間の新スポーツテストデータをもとにデータ解析を行った。

その結果、双生児男子は前期課程の 1 年生では、長座体前屈、持久走、立ち幅跳び、ボール投げにおいて有意に低い傾向にあるが、握力、上体起こし、反復横とび、50M 走は、6 年間をとおして全国平均値とほぼ同様の傾向にあった。これは、全身筋力、筋持久力、敏捷性、持久力、走力、柔軟性において全国の同年代の一般児の発育・発達と差がないということである。また立ち幅跳び、ボール投げにおいては、全国平均値に比べ 6 年間にわたり有意に低いという結果が出ている。以上のことを含め総合評価から考察すると、東大附属の双生児男子は入学時は体力・運動能力は全般的に低い傾向にあるが、後期課程になると全国平均値と差がなくなり、一般児と同様の成長をなすということがわかる。また、双生児女子については、入学当時から全国平均値と差がなく、後期課程になると特に反復横とび、持久走、50M 走において有意に高くなるという結果が得られている。これは敏捷性、持久力、走力において全国の同年代の一般児より優れているということになる。

これらの結果から、体格においては、一般児の中・高校生に比べ双生児男子は比較的小さく、双生児女子では体重が少ない傾向にあるが、しかし、体力・運動能力においては、全国の同年代の一般児と差がなく、それよりも優れている運動要素があるということがわかった。したがって、思春期スパート時における双生児の体力・運動能力の発育・発達は、同年代の子どもたちと比べると、体格的には多少小さい傾向であったとしても、年齢に応じた発達段階にふさわしい成長がなされているということがいえる。また、これらの研究から思春期スパート時の運動量の継続的確保と運動

実践の重要性が明らかになったともいえる。今後は、今回の分析で得られた結果を基に、生活環境や地域的特性の影響を含め、継続して調査を行っていきたいと考える。

## 文献

- 1) 文部科学省体育局：体格，体力・運動能力調査報告書.1990-1999.2000-2009.
- 2) 文部科学省：学校保健統計調査報告書.2000-2009
- 3) 宮下充正，平野裕一：才能教育・スポーツ科学からみて．放送大学教育振興会．3-44，2002
- 4) Watanabe T, Yamamoto Y, Miyashita M, Mutho Y. Secular Change in Running Performance of Japanese Adolescents :A Longitudinal Developmental Study.1998;10:765-779
- 5) 樋口満，水野忠文：双生児の身体発育・発達に関する横断的研究．東京大学教育学部紀要，16：347-362，1976
- 6) 大木秀一，浅香昭雄：双生児の成長と発達に関する研究(6)－双生児の学童期の身体発育－．小児保健研究，51(6)：715-720，1992

## 多胎出産の現状～妊産婦の観点から～

齋藤 令子（ツインマザーズクラブ）

### はじめに

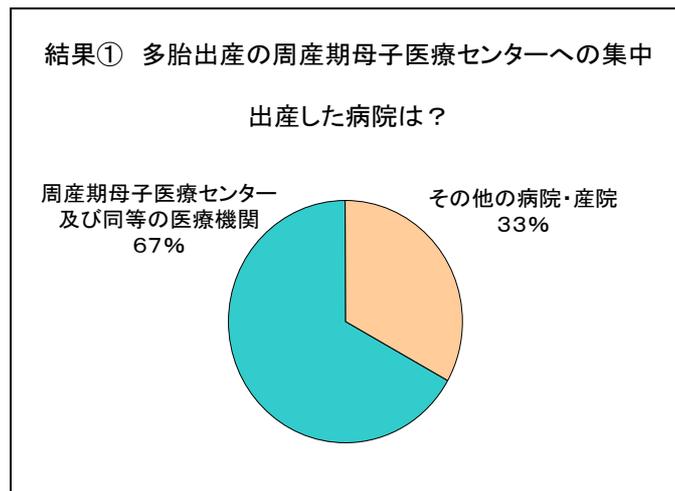
ツインマザーズクラブでは、09年5月に、03年4月から08年12月までの間に出産した会員を対象に、多胎出産について尋ねたアンケート調査を行った。アンケートは245名に送付し、173名から回答を得た。回収率は70.6%に上り、自由記述を求めた3つの質問も含め、回答者からは熱心な回答が寄せられた。

このアンケート調査のきっかけは、昨今の周産期医療を巡る報道の中、NICUを占拠しているとまで揶揄される多胎出産の当事者が、医療現場でどのような対応を受け、それに対してどのような感想を持っているかという疑問だった。結果としては、8割近くがその対応に満足していると答え、不満を表わした人は8.2%だったが、自由記述を丁寧に読むと、医師やスタッフのあまりの忙しさを目の当たりにする中で、無事に生まれたことだけで感謝しなくては…と感じている人も少なくないことがわかった。本稿では、調査から得られた結果を5点にまとめて報告する。

### 結果①：多胎出産の周産期母子医療センターへの集中

今回の調査では、回答者の67%が周産期母子医療センター及び同等の機関<sup>1</sup>（以後センターと略記）で出産していた。

<sup>1</sup> 本稿では、東京都福祉保健局のHPに掲載されている「東京都周産期母子医療センター等の現況」（2010年4月）の中の、「周産期医療情報ネットワーク参加」に参加している国立成育医療研究センターおよび、東京大学医学部附属病院での出産も、周産期母子医療センターでの出産に含めた。



周産期母子医療センターとは、周産期医療の高度化と集約化を目的に、旧厚生省が1996年から整備を始めた体制で、日本産婦人科医会のHPによれば、09年4月1日現在、総合周産期母子医療センターが全国に77施設、地域周産期母子医療センターが全国に342施設ある。10年4月には、佐賀県とともにセンターが未設置であった山形県が総合センター1施設、地域センター3施設を指定したので、上記の数字にも増加方向での変動があると思われる。

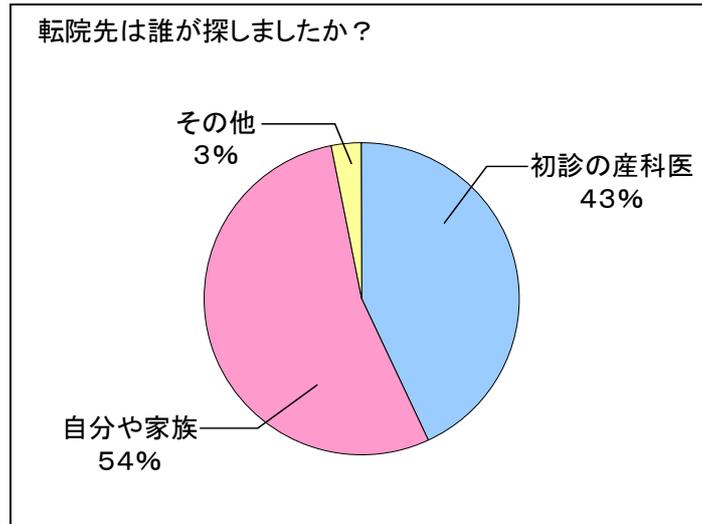
このような体制が整備されたこともあってか、今回の調査では、多胎と判明した時点で一般病院や個人クリニック、或いは不妊クリニックからNICUの床数を多く持つセンターへと転院する流れが顕著に見られた。転院とセンターでの出産との関係を統計的に見たところ、転院した人の79%がセンターで出産していたのに対し、転院しなかった人のうちセンターで出産した人は46%と、出産した場所に関して統計的に1%以下の水準で有意な違いがあった。

**転院とセンターでの出産の関係**

転院 \ 出産	センター	センター以外	合計
した	85人 (79%)	22人 (21%)	107人 (100%)
しなかった	30人 (46%)	35人 (54%)	65人 (100%)
合計	115人 (67%)	57人 (33%)	172人 (100%)

$\chi^2(1)=20.2, p<.0001$

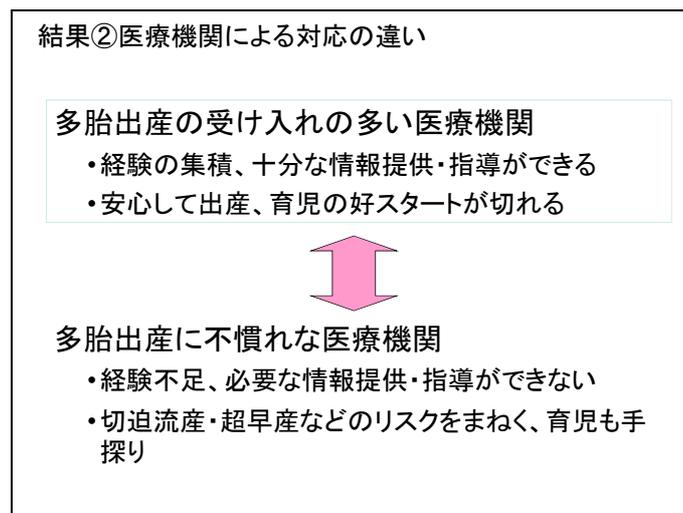
転院先を誰が探したかという問いには、自分や家族という回答が54%、多胎を確認した産院や病院の医師という答えは43%だった。



転院のいきさつに関しては、転院が必ずしもスムーズに行われたわけではなく、「多胎とわかった途端に紹介状を渡され、自分で10日以内に転院先を探すように言われた」とか、「NICUのある都内の病院全てに電話をしたが、年末まで予約でいっぱいだと断られた」などの経験談もあった。都内のかなり有名な大病院ですら、「そもそも多胎は初めからお断り」「一卵性は受け入れていない」などとしているところも複数あり、センターではない病院が多胎出産を避けているという現状も見えてきた。すなわち、多胎出産の経験を集積しているセンターと、それ以外の病院との間で、医師やスタッフの多胎出産の取り扱い経験値に差ができてきている可能性があるということになる。

## 結果②：医療機関による多胎出産への対応の違い

医療機関の対応について書かれた自由記述を読むと、同じ多胎出産であるのにこれほどまで医師やスタッフの対応が違うのかと驚くくらいであった。多胎出産を多く受け入れ、その経験を妊産婦への対応や指導に生かしている医療機関で、行き届いたケアを受けた妊産婦は、安心して出産し、育児指導も十分に受けて退院しているようだったが、多胎に不慣れで、その特殊性をあまり意識していない医療機関で出産した人は、その対応にいろいろな意味で不安や不満を持ったようだった。



具体的には、リスクの説明が不十分で「仕事も30週過ぎまで続けてOK」などと言われて切迫流産や超早産になりかかったり、妊娠中の様々な状況の変化に不安を抱いても適切な対応をしてもらえなかったり、出産後の多胎育児についての知識や情報をスタッフ自身が持っておらず、退院後大

変苦勞したとの体験談もあった。反対に、リスクを怖がる医師は及び腰で、「ふたごになっちゃった」「二人いるよ、どうする～」などという妊婦の気持ちを逆なでするような発言をしたり、「何かあったら転院してもらおうから」という責任逃れのような発言も見られた。

### 結果③：センターとセンター以外で対応が異なったのは、育児指導の有無

このようにしてできた経験の差が、センターとそれ以外の医療機関の対応の違いにどのように現れているかを統計的に検証したところ、多胎育児の指導において対応が異なるということがわかった。

**結果③センターとセンター以外で対応が異なったのは、  
育児指導の有無**

出産 育児指導	センター	センター以外	合計
あり	83人 (72%)	32人 (28%)	115人 (100%)
なし	32人 (56%)	25人 (44%)	57人 (100%)
合計	115人 (67%)	57人 (33%)	172人 (100%)

$\chi^2(1)=4.42, p=.035$

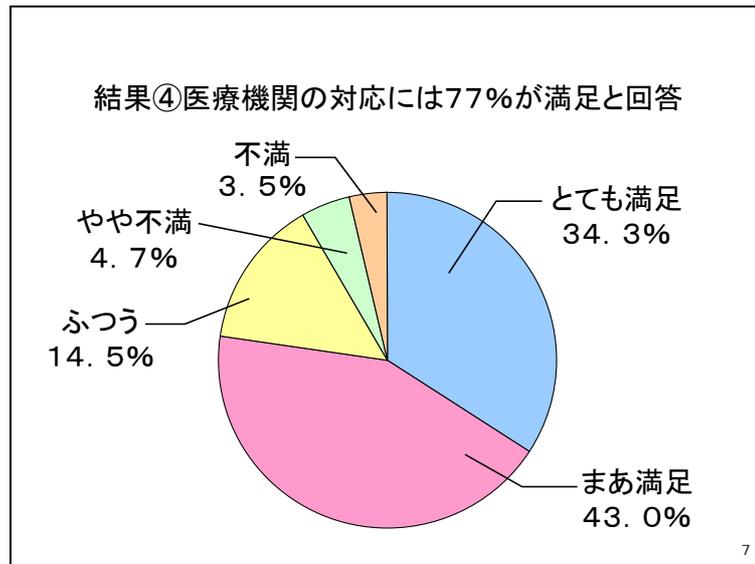
注意事項の説明の実施については、惜しくも10%水準で有意にならず、センターか否かが対応の違いにやや影響を及ぼしている傾向が感じられるにとどまったが、それ以外の項目、例えば多胎出産の危険性の説明や管理入院の実施、育児サポート情報の提供については、有意な関連は見られなかった。

多胎の育児指導の有無に関しては、センターで出産した人の72%が多胎育児の指導を受けていたのに対し、センター以外の人で指導を受けたのは57%だったという違いがあり、5%水準で有意な関連が見られた。すなわち、センターで多胎出産をした母親には、同時授乳などの多胎育児の指導が行われている可能性が高いということになる。実際、自由記述によれば、センターの中には母親への同時授乳の指導はもちろん、父親やおばあちゃんに対する育児指導を行っていたり、父親の泊り込みでの体験指導までしているところがあった。

一方、センター以外で出産した人からは、同時授乳どころか、多胎の育児指導など全くなく、よく考えないで母子同室を選んでしまいパニックになるばかりだったとか、退院後どうやって二人を育てたらいいかわからず途方に暮れた…というような感想があった。多胎育児指導の重要性を認識し、育児指導を積極的に進めているセンターには、そのノウハウを一般病院にも広めていただきたいと感じた。

### 結果④：医療機関の対応には77%が満足と回答

アンケートの最後で尋ねた医療機関の対応についての満足度に関しては、77%が「満足」と回答した。内訳は「とても満足」が34.3%、「まあ満足」が43%、「ふつう」が14.5%、「やや不満」が4.7%、「不満」が3.5%である。



平均6週間に及ぶ管理入院をした人が72%もあり、少しでも長くお母さんのお腹の中に胎児をとどめ、元気な赤ちゃんを産んでもらおうと努力してくれている医師やスタッフの姿を日夜目にする中で、多くの方が感謝と満足の気持ちを持ったようだった。自由記述にも、その献身的な姿への感謝が多く綴られていたが、少数ながら「不満」と感じた人は、多胎出産や育児の大変さを認識していない医師やスタッフの、デリカシーのない発言や態度に不満を感じたようだった。また、センターでの出産と満足度の関係が有意とならなかった理由も、このようなスタッフ個人に由来する対応の拙さにあるように思われたので、そのあたりの意識の向上については、関係者の一層の努力をお願いしたい。

結果⑤：多胎出産の満足度を左右するのは、

多胎出産特有の情報提供・指導・ケアの有無

医師や医療機関のどのような対応が満足度と結びついているかを調べたところ、多胎出産特有の情報の提供・指導・ケアを受けていた人は、そうでない人より満足度が高いという結果になった。具体的には、注意事項の説明、危険性の説明、多胎育児指導については、1%水準で、このような対応を受けたか否かで満足度に差があった。また、管理入院と、育児サポート情報の提供に関しては、5%水準でこのような対応を受けたか否かで満足度に差があるという結果になった。

結果⑤出産の満足度を左右するのは？

注意事項の説明	満足	ふつう	不満	合計	$\chi^2(2) = 38.465$ $p < .001$
あり	114	16	2	132	
なし	19	8	12	39	
合計	133	24	14	171	

危険性の説明	満足	ふつう	不満	合計	$\chi^2(2) = 14.590$ $p < .001$
あり	100	15	4	119	
なし	32	10	10	52	
合計	132	25	14	171	

多胎育児指導	満足	ふつう	不満	合計	$\chi^2(2) = 10.608$ $p = .005$
あり	95	16	4	115	
なし	38	9	10	57	
合計	133	25	14	172	

管理入院	満足	ふつう	不満	合計	$\chi^2(2) = 6.086$ $p = .048$
あり	101	15	7	123	
なし	32	10	7	49	
合計	133	25	14	172	

育児サポート情報提供	満足	ふつう	不満	合計	$\chi^2(2) = 7.440$ $p = .024$
あり	50	2	6	58	
なし	83	21	10	114	
合計	133	23	16	172	

すなわち、多胎出産・育児の特殊性について十分認識した医師やスタッフに、きめ細やかな対応をしてもらった人が、高い満足感を持って出産を終え、育児を始められたということになる。

### おわりに

出産を、その後長く続く多胎育児のスタートと考えれば、全ての人に悔いのない出産をしてほしいのだが、そのためには多胎妊娠、出産、育児についての情報が入手しやすくなる必要があると感じた。

ツインマザースクラブでは 2000 年に厚生労働省に要望して検討会を立ち上げ、「ふたごの育児 ふたご・みつごの赤ちゃんを育てるために」という小冊子を、厚生労働省児童家庭局母子保健課の名前で出版した。これを母子手帳交付の際に手渡すようにと願っていたが、10 年たった現在どのようになっているだろうか。アンケートでは、多胎妊娠・出産についての情報を行政の窓口で得たという回答は、わずか 3% だった。多胎妊娠をした全ての妊婦に、参考になる図書名や、ホームページのサイト名が記載されているリーフレットが行き渡れば、安静を命じられた人でも、情報収集がうまく始められると考える。

医療技術の進歩は、いたずらに多胎を増やすことから、体外受精での単胎妊娠率の向上へと向かっているとはいえ<sup>2</sup>、排卵誘発剤などを使った多胎妊娠の発生はこれからも続くものとする。多胎妊娠をした妊婦の一人でも多くが、十分な情報を入手し、指導、ケアを受けて、健康な赤ちゃんを産み、育てることができるような対応を行うことを、医療機関、行政には強く望みたい。

## 学会参加報告

### The 40<sup>th</sup> Annual Meeting of Behavior Genetics Association に参加して

敷島 千鶴（慶應義塾大学先導研究センター）

今年の行動遺伝学会（BGA）は 6 月 2 日から 5 日まで、お隣の国、韓国はソウルにて開催された。国際学会といえば、長時間の移動と時差に悩まされるのが常であるが、羽田からソウル金浦空港まで僅か 2 時間という身近さが、国際学会参加という緊張の舞台上、国内学会に立ち寄るような気楽

<sup>2</sup> 平成 22 年 4 月 24 日付の日経新聞夕刊によれば、「体外受精で子宮に移植する受精卵を 1 個にとどめる方法が 2008 年は全体の 60% を超え、07 年よりも 13 ポイント増えた」との調査結果が、国立成育医療研

さを感じさせてくれた。日本からは、慶應義塾ふたご行動発達研究センターより、センター長の安藤教授ほか、研究メンバーの平石、尾崎、山形、高橋（敬称略）、敷島が参加し、2つの口頭発表と3つのポスター発表を行った。扱ったテーマは、幼児の問題行動から、成人の経済行動、うつ傾向、知的能力、そして統計学的方法論と広範に及び、着実に積み上げてきた研究成果の数々が世界に向けて発信された。いずれの研究も独創性溢れるデザインに依拠した重要な知見を産出しており、それぞれが活字となって、再び世界を舞う日が近いことを確信している。

とは言え、これまで行動遺伝学研究が、欧米主導で展開されてきたことに疑いはない。そのことは、BGAが40回目にして、初めて今回アジアで開催されたことにも象徴されている。今年も例年同様に、とりわけ、スウェーデン、フィンランド、オランダ、イギリス、オーストラリア、アメリカ諸国における、国や州が管理する双生児レジストリに基づく膨大な数の双生児を対象とした、莫大な研究費を投じた力づくの研究が、小規模な手作りの研究（われわれのを含む）を圧倒していたのは確かであろう。分子遺伝学や脳神経科学、あるいは心理学や社会学という隣接領域との容易な連携、学界における行動遺伝学ディシプリンの浸透、そして、行動遺伝学者を研究機関に迎える門戸の広さという欧米の現状のどれひとつをみても、いまの日本の実情とは懸け離れたものであることを認めざるを得ない。

こうした「格差」を考えた時、新しい道を切り拓いていく可能性を孕むアプローチのひとつとして、日本の行動遺伝学研究が担うことができるのが、「文化行動遺伝学」の導入であると考えている。これまでの欧米の行動遺伝学研究が繰り返してきたのは、人間の特性における遺伝環境構造の普遍性である。一方われわれは、日本人双生児を対象とした調査から求めた遺伝と環境の寄与の中に、必ずしも欧米のそれを再現しない特性があることを明らかにしている。社会構造の違いが、遺伝環境構造の違いとなって現れるとするこの視点は、これまで説明することのできなかつた人間の行動の異文化間の多様性に対し、原因論から体系的論拠を与え得るアプローチとして注目できる。今後の進展に期待して欲しい。

最後に私事で恐縮であるが、私は今回の発表に先がけ、自宅で娘を相手に特訓していった成果か、本番の口頭発表では緊張することもなく、15分間に30枚のスライドを送り、無事終了と安堵しようとしていたところ、フロアから難しい質問が投げられた。すっかり動転してしまい、支離滅裂の返答しかできず、今でもあの時の焦りはトラウマとなって蘇ってくる。下の写真は、質問者のオランダのPolderman博士が、セッション終了後、困惑させた発表者にお見舞いの言葉をかけに来てくれたときの様子である。急な質問にも何とか平常心で対処できるよう、日頃の英会話の訓練の必要性を痛感した次第である。

## The 13<sup>th</sup> International Congress on Twin Studies の参加報告

西原 玲子（大阪大学医学系研究科保健学専攻）

今年6月4日から7日にかけて行われた International Congress on Twin Studies に参加したので、その様子について紹介します。会場となったホテルはソウル市内にあり、ソウルまでは日本（大阪）から飛行機で1時間30分程で着きます。市内の移動にはよく整備された地下鉄を使い、大阪出身の私には、外国に来た感覚というよりも東京に来たように感じました。シンポジウムの発表者に

---

究センターにより明らかにされている。

は、数々の著書を出版している研究者も多く、発展し続ける双生児研究の現状について知ることができました。5日のシンポジウムでは認知機能について R. Plomin 教授らの講演があり、分子遺伝学と関連して行動遺伝学を発展させることについて研究報告がありました。このシンポジウムのメイン会場には多くの研究者が参加しており、欧米から以外にもアジアの研究者もおり注目の高さをうかがうことができました。メイン会場以外にもいくつかの会議場に分かれて研究発表が行われており、多胎児をもつ家族のための講演や、新たに進められている双生児レジストリーの紹介などがありました。双生児レジストリーの紹介では、マレーシアで進められている計画について発表があり、ボランティアによる登録、病院を基点とした募集、地域を基点とした募集について様々な募集の工夫が報告されました。その他には、パーソナリティ、ART（生殖補助技術）、ロシアや中国における双生児研究についてなどの研究発表がありました。

開催期間中は初夏の日差しがきつく外は暑かったのですが、ホテル会場内はクーラーがよく効いていて寒いくらいでした。こういう会場には羽織ものは必須だと実感しました。5日の夕食は韓国の研究者の主催で食事があり、私も参加させてもらいましたが、韓国料理を囲んでアジアの研究者の方たちと各自の研究の紹介をしたり課題の克服について工夫していることを話し合ったり、美味しい韓国料理の説明を聞いたりと有意義な時間を過ごしました。International Congress on Twin Studies には4年前にも参加しましたが、医学や心理学、分子生物学以外の分野でも注目され、急速に発展していることを実感しました。

## COMBO とツインマザーズクラブ

杉浦 祐子（ツインマザーズクラブ）

6月4日から7日まで、韓国のソウルで開催された第十三回国際双生児研究学会の各国の親の会の代表者で構成されている COMBO（Council of Multiple Birth Organizations）にツインマザーズクラブ（TMC）の関西地区の森光子さん、穴山美保さんと JAMBA の田中照子さんの4人で参加しました。

羽田から2時間半、ホテルについて早速、会場のグランドハイヤットソウルホテルに向かいました。

Welcome Reception にまず参加。今まで何回か参加したのですが、ソウルでは、開会のご挨拶もなく大変簡単な Reception でした。でも日本では、なかなかお逢いできない先生方にお目にかかれました。早川先生の研究のプロジェクトにいらっしゃった、今はツインのママになられ、TMC のメンバーでもある中村（林）先生ご一家にもお逢いできました。もうじき2歳になられるふたごちゃんは、会場のアイドルでした。また東京の学会（1992年）からおなじみになったキースご兄弟にもお逢いできました。お元気で、おそろいのお洋服で登場されました。75歳になられたそうです。

久しぶりの参加でしたが、ISTS の研究発表は、ポスターセッションを含め、医学・心理学など盛りだくさんでした。2泊3日の短い滞在だったので、COMBO のみの参加です。

COMBO Session では、JAMBA（一般社団法人日本多胎支援協会）の理事でもある大木秀一先生が日本の多胎育児の現状や JAMBA の発足について演題発表されました。また、カナダ、オーストラリア、スイス、フィンランドからも、それぞれの組織の活動や成果と課題について発表がありました。

しかし、参加者は、カナダ（現在の COMBO の代表者）、アメリカ、オーストラリア、フィンラ

ンド、スイスなどの国から二十名ほどで、午後のミーティングでは、私達も含め十名の参加で、開催国の韓国や近隣のアジア諸国やイギリス、アメリカの当事者の参加はなく、残念でした。ミーティングの内容は、

- ・ COMBO が ICTS から独立した組織「ICOMBO」になること
- ・ それに伴って、現行の3年に1度が、2年に1度の開催になること
- ・ 会費や役割分担（広報、啓発、調査など）について
- ・ 会員をどのようにふやすか
- ・ 新しいロゴマークについて
- ・ 「COMBO 宣言」の改訂についてなどが話し合われました。

ミーティングの間、英語力のない私達に力を貸していただいたのは、大木先生でした。感謝です。

TMC では、第6回のローマ大会から天羽先生が参加され、7回の東京大会では多くの TMC の会員がボランティアで活躍しました。

8 回目のアメリカ・リッチモンドからツアーを組んで、何人かで参加するようになりました。このリッチモンドの COMBO で「ふたご・多胎児の権利の宣言とニーズの声明」が採択されました。

そのあとヘルシンキ、ロンドン、デンマークに参加しています。演題発表は、英語ということもあり、むずかしいのですが、ポスターセッションでは、毎回発表しています。

今回は、急に参加することになり、満足のいくポスターはできなかつたのですが、なんとか写真、絵などをはりつけて「ツインマザースクラブの 2000 年からのおもな活動」について展示してきました。

TMC では、東京の ICTS の時にイギリスの TMBA の方にすすめられて「電話相談」を 1994 年から始めたこともあり、長い歴史の中での COMBO と TMC の関わりなので、これからも多くの先生方にご協力をいただいて参加していこうと考えています。

しかし、この ICTS への TMC の参加は、会員の意志で参加するので、旅費、参加費はすべて自費ですので、なかなか誰もが参加することができない状況です。

日本における当事者の多胎の支援は、世界の中でも誇っていいのではないかと確信してきましたが、行政レベルでいくとまだまだだと感じます。国が違っても多胎家庭の大変さは、同じだと思います。Web が便利になった昨今、COMBO のメンバーの方々と情報交換が盛んになっていくことと思います。

さて、5 日の夕方、森さんのご案内で、ソウル市内の散策。今はやりのミョンドンのコスメのお店などをのぞき、おいしい焼き肉を食べて、ホテルへもどりました。夜は、4 人で購入したばかりの「足パック」などしながら、夜中まで楽しくおしゃべり。6 日は、午前中、昌徳宮に行ってみました。ここは、1997 年にユネスコ世界文化遺産にも登録された宮殿で 1405 年、正宮である景福宮の離宮として建造された宮殿で、約 270 年に渡って李氏朝鮮王朝の政務が行われた王の御所です。そのあと観光用に行われている景福宮での「衛兵の交代」を見ました。朝は、おかげ、昼は、サムゲタンと短いソウル滞在でしたが、駆け足で満喫しました。

多胎の母親という共通点でこんなに楽しい COMBO ソウルツアーとなり、これからのそれぞれの活動に意義があったらと願いつつ、帰国しました。

## 論文・抄録紹介

「大規模成人双生児コホートにおける機能性身体症状の潜在クラス分析」

### **Latent class analysis of functional somatic symptoms in a population-based sample of twins**

**Kenji Kato (Senri Kinran University, Japan)**

**Patrick F. Sullivan (University of North Carolina, USA)**

**Nancy L. Pedersen (Karolinska Institutet, Sweden)**

*Journal of Psychosomatic Research*. Vol.68, No.5, pp.447-453, May 2010

#### 【目的】

本研究は、機能性身体症候群 (functional somatic syndromes: FSS) の種々の症状をどのように分類すべきかについて実証的に調べるとともに、そうした分類に關与する遺傳的・環境的影響を検討することを目的として行った。

#### 【方法】

1998年から2002年にかけて、41～64歳の成人双生児28,531人を対象に、コンピュータ化されたデータ収集システムを利用してスクリーニングを実施した。スクリーニングは構造化・盲検化された質問法をもとに、以下の9つの身体症状について回答を得た — 異常な疲労感・全身性の筋肉痛・頻発する腹部不快感・背部痛・上部消化管の逆流・慢性頭痛・慢性尿路症状・ふらつき・安息時の息切れ。データの分析には潜在クラス分析法を用いた。各潜在クラスに分類される確率における遺傳的・環境的影響の推計には構造方程式モデリングを用いた。

#### 【結果】

潜在クラス分析の結果、5つのクラスが得られた。第1のクラスに分類された対象者はいずれの身体症状も持たなかった。第2・3・4のクラスに分類された対象者はそれぞれ、異常な疲労感・消化器症状・疼痛を有する傾向にあった。第5のクラスでは他と比べて、複数の身体症状が併存する程度が大きかった。5つのクラスはいずれも遺傳的要因による影響が見られ（全分散の7～29%）、また第3クラス以外ではその影響度が男女で有意に異なった。しかし各クラスへ分類される確率の大部分は固有の環境要因によって説明された。

#### 【結論】

FSSの個々の症候群（慢性疲労症候群・過敏性腸症候群・線維筋痛症など）の現行の診断基準は、身体症状が単一か複数かという見地から再検討が必要であることが示された。またFSSの発症機序には固有環境要因による影響が重要であることが見出された。

**LIFESTYLE FACTORS AFFECTING THE DECLINE OF  
HIGHER-LEVEL FUNCTIONAL CAPACITY IN ELDERLY TWINS**

**T.Ohno, S.Ogata, K.Hayakawa, R.Nishihara**

Department of Health Promotion Science, Faculty of medicine, Osaka University, Osaka, Japan

The purpose of this study is to clarify the life style factors affecting the higher-level functional capacity of Japanese elderly twins by cotwin control analysis in MZ twins. The mailed questionnaires survey was conducted for 533 pairs of Japanese twins aged 65 years old and over. Responses from 494 subjects were analyzed. The Tokyo Metropolitan Institute of Gerontology (TMIG) Index of Competence was included in the questionnaires to measure basic characters, anamnesis and Higher-level Functional Capacity. Health Practice Index (HPI) was included in the questionnaires to measure health habits as life style factors. In MZ twins, TMIG-IC indicated the significant intrapair correlation on all measures. In DZ twins, TMIG-IC did not indicate any significant relation on measures of the active capacity and the intellectual activity. However, there was significant intrapair correlation on measures of the social activity and Instrumental Activities of Daily Living (IADL) in DZ twins. In male MZ twins, TMIG-IC indicated the moderate positive correlation between the intrapair difference on the active capacity and intrapair differences on the sleeping hours and also on the extent of feeling stressful. Those who had more exercise habits than the other within the pair tended to get higher scores of the active capacity. Those who had less exercise habits than the other within the pair tended to get lower scores of the active capacity.

**Impact of the increasing number of multiple births on the low birthweight  
and preterm delivery during the last thirty years in Japan: Vital statistics,  
1975-2008**

**Syuichi Ooki**

Department of Health Science, Ishikawa Prefectural Nursing University, Ishikawa, Japan

Background: Despite the rapid increase in multiple births because of the widespread use of fertility treatments, there is no clear epidemiologic evidence that estimates the long-term impact of multiple births on the low birthweight and preterm delivery rates in Japan.

Methods: Japanese vital statistics of multiple live births presented by the Ministry of Health, Labor and Welfare were gathered and reanalyzed. Secular trends of relative risk and population attributable risk percent of multiple births for low birthweight (<2500g), very low birthweight (<1500g), and extremely low birthweight (<1000g) using 1975-2008 vital statistics and premature delivery (before 37, 32 and 28

weeks) using 1979-2008 vital statistics were calculated with singletons as the reference group. Results: Multiple births rates increased twice during the past two decades, and about 2% of all neonates are now multiples. The population attributable risk percent tended to increase as a whole during the same period concerning all categories, and recently reached around 20%. Conclusions: The public health impact caused by the rapid increase in multiple births remains large in Japan, and should not be ignored.

## **Genetic contribution to the relationship between social role function and depressive symptoms in elderly twins**

**Reiko Nishihara,<sup>1</sup> Fujio Inui,<sup>1,2</sup> Kenji Kato,<sup>1,3</sup> Rie Tomizawa,<sup>1</sup> YangPing Cai,<sup>1,4</sup>  
Kazuo Hayakawa<sup>1</sup>**

<sup>1</sup> Department of Health Promotion Science, Osaka University School of Medicine

<sup>2</sup> Department of Nursing, Hakuho Women's College

<sup>3</sup> Department of Nursing, International University of Health and Welfare at Odawara

<sup>4</sup> Beijing University of Chinese Medicine Dongzhimen Hospital

Social role function is the capacity to maintain interpersonal relationships and is essential for being independent in the community. Limitations in social role function often coexist with depressive symptoms, suggesting a possible common mechanistic basis. We investigated whether the observed association between these traits is mainly due to genetic or environmental influences. Our sample included 92 monozygotic and 31 dizygotic male twin pairs aged over 65 years. Our results show that genetic influence was the major contributor to the relation between social role function and depressive symptoms, and individual unique environmental influence was important for overall variation in each trait. We concluded that focusing on an individual's unique environment is an essential approach for maintaining social role function and psychological well-being.

## **Lifestyle and Environmental Factors Affecting Intra-pair Differences of Depressive Symptoms in Aged Identical Twins**

**Rie Tomizawa , Shiho Saiki ,Tomoyo Ohno ,Reiko Nishihara ,Kazuo Hayakawa**

Department of Health Promotion Science, Graduate School of Medicine, Osaka University, Japan

### **【Objective】**

This study aims to clarify the lifestyle and environmental factors affecting the intra-pair differences of depressive symptoms in aged identical twins in their later adulthood. **【methods】** The self-reported questionnaire survey was conducted for 120 twin pairs aged over sixty years old. The questionnaires included GDS 15 (Geriatric Depression Scale 15 Item Version), Breslow's seven item (Body Mass Index,

alcohol intake, smoking, sleeping, breakfast intake, physical exercise , and minimal snacking), ADL, economic situations and stress, subjective health feeling and the life events. Data was analyzed by Kruskal-Wallis Test and One-way layout Analysis of Variance. 【results】 There was no significant difference of intra-class correlation coefficients of GDS scores between monozygotic and dizygotic twins. When the data was analyzed individually as a person, not as a pair, it was shown that the GDS score tended to be inversely proportional to IADL score in male twins. Subjective health feeling, economic situation and physical exercise also tended to show a inverse proportion to GDS scores in male twins ( $p<0.01$ ). In female twins, subjective health feeling tended to show a inverse proportion to GDS score ( $p<0.05$ ). 【conclusion】 It was assumed that depressive symptoms in later adulthood were strongly related to lifestyle and environmental factors.

## 書 評

### 天羽 幸子『新ふたごの世界』ブレーン出版、2008 年

評者：田中 輝子（日本多胎支援協会）

本書はツインマザーズクラブの現名誉会長の天羽幸子先生が、ご自身の一卵性双生児の息子さんと家庭訪問で直接面接しながら記録した約 10 組のふたごの様子、そしてツインマザーズクラブ会員の体験談などを織り込み 1988 年に出版した「ふたごの世界」に、さらに新しい情報などで加筆修正し、2008 年に出版されたものです。旧版から 20 年の時を経て再編された本書は、ふたごの発生、そして成長しそれぞれの家庭をもつふたごの様子も網羅されました。

育児という営みは特別なことではないとわかっていても、二人を同時に育てる困難や、二人の関わりから感じる面白さは、単胎の育児とは違う特別なものです。著者は心理学者として、またふたごの母親としての両方の眼で、ふたごの発育や発達そして二人の関わりを丁寧に温かく見守り、解き明かしています。だからこそふたごの養育者にとっては「我が家も同じ!」「やっぱりそうなんだね」と納得できる本であり、また研究者にとっても、数字だけではない「ふたごの世界」を知るための貴重な一冊になっているのではないのでしょうか。

### 小島 潤子『双生児 — 魂の境界領域』角川学芸出版、2009 年

評者：早川 和生

日本双生児研究学会の会員であり、本人も一卵性双生児である著者が双生児を題材にした漫画やアニメの心理的分析から双生児の精神的な内面や世界観を描いた文章構成になっている。本書は、第 I 部「双生児をめぐる深層心理」、第 II 部「双生児心性の一般化の試み」、そして附論「双生児論から日本人論への発展へ」へと続く非常に吟味された内容構成になっている。本書は、深層心理学の知識がない人にも理解できるように一般の人々に親しみ易いマンガやアニメの作品に描かれた双生児を題材に独自の視座から深く分析する内容になっている。

## 2010年日本双生児研究学会総会報告

日時：平成22年1月23日 13:30～14:00

場所：石川県生涯学習センター

議題（報告事項）：

1. 平成21年の活動報告
  - 1) 研究会（第27回、第28回）について
  - 2) ニュースレターについて
  - 3) 幹事選挙の結果について
  - 4) 会員状況報告
2. 平成21年の会計収支報告及び監査報告
3. 学会ホームページについて
4. 平成22年の活動予定について
  - 1) 第25回学術集会の準備状況について
  - 2) ニュースレター発行について
  - 3) 第29回研究会について
5. 平成22年の予算案について
6. その他
  - 1) 韓国ソウル市での国際学会 The 13<sup>th</sup> International Congress on Twin Studies の開催について

## 日本双生児研究学会幹事会・議事録

日時：平成21年12月12日（土）15:00～16:00

場所：大阪大学医学部保健学科3階会議室

議題：

- 1、平成22年1月からの新幹事選出の選挙結果について  
大木秀一選挙管理委員長より12月12日に大阪大学にて開封した投票結果について集計報告があった。幹事会において、集計結果の上位8名および会長推薦3名を加えた下記11名を新幹事とすることが全員一致で了承された。  
大木秀一、早川和生、安藤寿康、横山美江、加藤則子、志村恵、野中浩一、杉浦祐子、加藤憲司、菅原ますみ、小野寺勉
- 2、日本双生児研究学会奨励賞の授与候補者の決定について  
早川和生選考委員長より応募締切日までに応募書類の提出があった1名について奨励賞選考委員4名（安藤寿康、野中浩一、加藤則子、早川和生）が審議した結果、全員一致して下記の候補者に奨励賞を授与することとしたことが報告され、幹事会として異議なく了承した。また、受賞者には副賞（5万円）の授与が承認された。  
奨励賞受賞候補者：加藤憲司（国際医療福祉大学、講師）

報告事項：

- 1、 平成22年1月開催の第24回学術集会の準備報告  
大木秀一学術集会長より準備作業が順調に進んでいることが報告され数多くの参加者を期待していることが報告された。
- 2、 ニュースレター第46号発行について  
横山美江編集委員より第46号ニュースレターの編集は順調に進んでおり12月に発行され会員の手元に届く予定であることが報告された。
- 3、 その他
  - 1) 学術集会で研究発表する本人は会員に限ることが確認された。ただし共同研究者で連名になっているものについては非会員でも認めることが確認された。
  - 2) The 13<sup>th</sup> International Congress on Twin Studies を主催する韓国の Dr. Yoon-Mi Hur が第24回学術集会に参加する希望を持っていることが大木秀一学術集会長より報告された。
  - 3) 学会の年会費の支払いを学術集会の受付でも行うことが望ましいとの意見が横山美江幹事より出され、次回の学術集会から始めることが事務局より回答された。
  - 4) 学会の団体会員について検討する必要があるとの意見が杉浦祐子幹事から出され今後、継続審議していくこととなった。

日時：平成22年1月23日 12:00～13:30

場所：石川県生涯学習センター

出席：安藤寿康、今泉洋子、小野寺勉、大木秀一、加藤憲司、志村恵、菅原ますみ、杉浦祐子、野中浩一、早川和生

欠席：加藤則子、横山美江（敬称略）

（新旧の幹事の合同幹事会として開催した）

議事次第：

1. 平成21年の活動報告
  - 1) 第27回研究会、第28回研究会について（事務局より報告）  
第27回研究会 2009年5月23日 慶応義塾大学三田キャンパス  
田中麻未（お茶の水女子大学大学院人間文化研究科）  
「児童・思春期の抑うつ傾向の遺伝と環境—双生児研究法による検討—」  
第28回研究会 2009年12月12日 大阪大学吹田キャンパス  
福島昌子（東京大学教育学部附属中等教育学校教諭）  
「中・高校生の双生児における身体形態（体格）身体機能（体力・運動能力）の発育・発達」
  - 2) ニュースレターの発行について（志村恵編集委員より報告）  
第45号を7月に、また第46号を12月に発行した。研究発表とともに国際学会についても案内を掲載した。
  - 3) 幹事選挙の実施について（大木秀一選挙管理委員長より報告）  
会員136名に投票用紙を郵送し、41名（有効投票40票、白票1票）より投票用紙の返送があり、平成21年12月12日に大阪大学にて開封し集計結果に基づき上位8名および会長推薦の3名を加えた計11名を平成22年から新幹事とすることが開票当日開催の幹事会にて全会一致で承認されたことが報告された。（新幹事：大木秀一、早川和生、安藤寿康、横山美江、加藤則子、志村恵、野中浩一、杉浦祐子、加藤憲司、菅原ますみ、小野寺勉）
  - 4) 会員状況（事務局より報告）  
現在会員数：136名、新規入会6名、退会9名、名誉会員10名

2. 平成21年の会計収支報告（別紙参照）及び監査報告  
別紙資料に基づき事務局より平成21年会計収支(2009年1月1日～2009年12月31日)の報告がされた。また浅見恵利子監査より平成21年監査について監査報告があり、収支帳簿記載、証拠書表、現金、預金通帳の提示を受け平成21年会計収支報告書に基づき監査の結果、いずれも適切であったことが報告された。
3. 平成22年会計予算案について（別紙参照）  
事務局より平成22年(2010年1月1日～2010年12月31日)会計予算案について資料に基づき報告され、異議なく承認された。
4. 奨励賞の授与について（事務局より報告）  
平成21年に募集した第1回奨励賞受賞者について奨励賞受賞選考委員（安藤寿康、加藤則子、野中浩一、早川和生）の全員一致にて加藤憲司（国際医療福祉大学、講師）を奨励賞受賞者として選出したことが報告された。また受賞者には副賞（5万円）が授与されることが報告され、受賞講演が1月23日の学術講演会において予定されていることが報告された。なお大木秀一幹事より奨励賞授与者の決定を次回からは可能な範囲で早い時期に決定することにより学術集会のプログラム作成が容易になるとの意見が出され、次回から奨励賞の受賞者決定を早める方向で検討することとした。
5. 学会ホームページについて  
ホームページ担当の加藤憲司幹事よりホームページの充実を進めていると報告された。また学会の英文名は「Japan Society for Twin Studies」で統一することが確認された。
6. 平成22年活動予定について
  - 1) 第25回学術集会について  
菅原ますみ第25回学術集会長より平成23年1月29日（土）にお茶の水女子大学にて開催予定であることが報告された。
  - 2) ニュースレターの発行について  
志村恵編集委員より例年通り年2回の発行を予定していると報告された。
  - 3) 平成22年春の研究会について  
安藤寿康幹事より昨年と同様に慶応大学において開催計画であることが報告された。
  - 4) その他  
大木秀一幹事より第24回学術集会の参加者数は午前中の集計で88名と報告された。

日時：2010年6月19日、16:00～17:00

場所：慶応義塾大学三田キャンパス第1校舎3階132番教室

出席：安藤寿康、小野寺 勉、菅原ますみ、早川和生

議題：

1. 第25回日本双生児研究学会学術講演会について  
菅原ますみ大会長（お茶の水女子大学）より2011年1月29日にお茶の水女子大学（東京都文京区大塚2-1-1）にて第25回学術講演会を開催予定で、プログラムの概要説明があり承認された。
2. 第26回日本双生児研究学会学術講演会（2012年開催）の大会長について  
東京大学教育学部附属中等教育学校の村石幸正先生（副校長）を大会長として開催することが提案され全会一致で承認された。
3. ニュースレターの発行について  
志村恵編集委員長が欠席のため小野寺幹事より志村編集委員長からの連絡でニュースレターの編集作業は順調に進んでおり例年通りの時期に発行予定との報告があった。
4. 奨励賞候補者の募集について  
次号のニュースレターにて奨励賞候補者の募集を昨年と同様に実施する予定であり、適切な候

補者の推薦を期待していると事務局より報告があった。

#### 5. その他

- 1) 学会ホームページ担当の加藤憲司幹事よりメール連絡にてホームページの更新の頻度をより高める予定との報告があった。
- 2) 会員メーリングアドレスの管理について小野寺幹事よりメーリングアドレスの変更した会員について速やかに手続きしていると報告があった。
- 3) 次回の研究会については、池ノ上 克先生（宮崎大学医学部附属病院長）の講演を10月に大阪大学にて開催予定との報告が事務局よりあった。

## 平成 22 年度日本双生児研究学会奨励賞授賞候補者推薦方法について

平成 22 年度日本双生児研究学会奨励賞授賞候補者がありましたら、平成 22 年 8 月末日までに下記選考規程によって御推薦ください。

### 日本双生児研究学会 奨励賞選考規定

#### ・ 設立目的

日本双生児研究学会奨励賞は、不断に亘る真摯な研鑽により優れた研究業績をあげている本学会会員を顕彰することにより、我が国の双生児研究の領域における学問水準の飛躍的向上を図ることを目的とする。

#### ・ 受賞候補者の資格

日本双生児研究学会の会員で、応募締切日に原則として 45 歳未満であること。

#### ・ 対象となる研究業績

双生児研究に関する独創的研究で、将来の発展を期待しうるもの。研究業績は、国際誌に掲載されているか、日本双生児研究学会学術講演会で口演後に学術雑誌に掲載されていること（受理されていても未刊行のものは含めない。）

#### ・ 推薦方法

原則として幹事が推薦し、推薦できる人数は 1 年につき 1 名とするが、自薦も可。推薦者は、受賞候補者に関する下記の書類（論文別刷以外の書類は A 4 版の大きさの用紙に横書きに記載したものとする。）各 4 部を 8 月末日までに日本双生児研究学会事務局に提出する。

- 1) 受賞候補者の氏名、所属、所属先住所、略歴、関連論文目録
- 2) 業績の概要(A4 版用紙 1 枚程度に纏めること)
- 3) 受賞対象となる研究業績に係わる論文の別刷

#### ・ 受賞

- 1) 選考委員会の推薦に基づいて、幹事会が 12 月 15 日までに決定する。
- 2) 受賞者は原則として 1 名とする。
- 3) 受賞者には賞状および副賞を贈呈する。
- 4) 授賞は、日本双生児研究学会学術講演会の総会において行われる。
- 5) 選考委員会は別に定める。

# 日本双生児研究学会

## 第 25 回学術講演会開催のご案内（第 1 号通信）

ご挨拶

日本双生児研究学会第 25 回学術講演会を、東京・お茶の水女子大学で開催させていただくことになりました。本大会は、一般発表（発表 15～20 分、質疑 5 分）とシンポジウムで構成したいと考えております。充実した大会となりますよう努力したいと存じますので、どうかよろしく願い申し上げます。前回の金沢での大会と同様に、多くのみなさまのご参加やご発表をいただきたいと存じます。どうぞ、奮ってご発表・ご報告の演題をお寄せくださいますようお願いいたします。

2010年7月吉日

日本双生児研究学会第25回大会準備委員会  
委員長 菅原ますみ

### ① 講演会の概要

#### 1) 会期と会場

会期：平成23年(2011年)1月29日(土) 9:30～18:00 (予定)

会場：お茶の水女子大学(〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1) <http://www.ocha.ac.jp>

#### 2) 主なプログラム

① 研究発表(口頭発表)

② シンポジウム (テーマ:ライフスパンを通じた双生児の心身の発達(仮))

※ 詳細につきましては、12月下旬にお送りするプログラムをご覧ください。

#### 3) 幹事会

講演会当日1月29日(土)に幹事会を開催いたします。詳細については別途ご連絡します。

#### 4) 懇親会

講演会当日(1月29日・土)の夕刻からの開催を予定しております。多くの皆さまのご参加をお待ちしております。

### ② 研究発表の申し込み

発表・報告いただける方は、演題名、発表者名、全員の所属および発表要旨を、A4 用紙 1 枚 (600～1000 字程度) にまとめて郵便、またはメールに添付して下記送付先までお送りください。なお、発表時のスライドは Windows の PowerPoint の使用となります。

【締め切り】2010 年 11 月 4 日 (木) (必着)

【送り先、およびお問合せ先】

〒112-8610 東京都文京区大塚 2 - 1 - 1

お茶の水女子大学 文教育学部 心理学講座 菅原ますみ研究室

(日本双生児研究学会第 25 回学術講演会大会事務局) 菅原ますみ 宛

TEL&FAX : 03-5978-5270 E-mail : sugawara.masumi@ocha.ac.jp

### ⑤ 会費について

参加費：2,000円 懇親会費：3,000円(事前申し込み)

## ⑥ 託児について

託児サービスはございません。予めご了承くださいますよう、お願い申し上げます。

## ⑦ 宿泊について

大会事務局では予約の斡旋はしておりません。必要な方は各自でご予約頂くようお願いいたします。

## ⑧ 交通のご案内（ウェブサイトも併せてご覧ください：

<http://www.ocha.ac.jp/access/index.html>)



- お茶の水女子大学の最寄り駅：
- 東京メトロ丸ノ内線「茗荷谷」駅(徒歩7分)
  - 東京メトロ有楽町線「護国寺」駅(徒歩8分)
  - 都営バス「大塚二丁目」停留所(下車徒歩1分)

最寄り駅までのアクセス（時刻表等は各機関のWEBサイトにてご確認ください）

JR池袋駅から：東京メトロ丸ノ内線「新宿、荻窪方面行」茗荷谷駅下車／東京メトロ有楽町線「新木場方面行」護国寺駅下車

都営バス-都02乙「春日駅(一ツ橋)行」大塚二丁目下車

JR東京駅 又は JR御茶ノ水駅から：東京メトロ丸ノ内線「池袋方面行」茗荷谷駅下車

JR大塚駅から：都営バス-都02「JR錦糸町駅行」大塚二丁目下車

注) 駐車スペースはございませんので、公共交通機関等をご利用ください。

## ⑨ お問い合わせ・連絡先

〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1 文教1号館207号室

お茶の水女子大学 菅原ますみ研究室内

日本双生児研究学会第25回大会準備委員会事務局

TEL&FAX: 03-5978-5270 E-mail: sugawara.masumi@ocha.ac.jp

## エリザベス・ブライアン先生追悼記事

(BAPM Newsletter February 2010)

### Elizabeth Bryan, MD, DCH, FRCP, FRCPCH (1943 - 2008)

Elizabeth Bryan, Honorary member of the BAPM, died on 21 February 2008 at the age of 65. As Founders Lecturer 2001, she spoke on "The fascination of twins". Indeed, multiple pregnancy and its implications for both the parents and their children had been her main professional interest. No one did more to research and publicise the medical and psycho-social problems attending this increasingly common and previously neglected complication of reproduction. Besides her four books on the subject, she co-founded and directed the Multiple Births Foundation from 1978, becoming its inaugural President in 1998. She was also President of the International Society for Twin Studies, 1998-2001.

Elizabeth was the eldest of three sisters born to Betty and Sir Paul Bryan, MC, MP of Yorkshire. Educated at Benenden School, she trained in medicine at St Thomas's Hospital, qualifying in 1966. Following training at the Hammersmith, in Birmingham and in Yorkshire, she was appointed consultant paediatrician to Queen Charlotte's and Chelsea Hospital in London in 1979.

A happy and very positive person Libby, as she was known to her many friends, had great charm and an ability to empathise with others. Her bubbly enthusiasm and powers of persuasion, combined with hard work and organisational skills, enabled her to achieve significant advances not only in respect to multiple births but also in regard to infertility and bereavement. Both these subjects she understood only too well herself for her family was seriously afflicted with the BRCA 1 gene. Having undergone bilateral mastectomies and oophorectomies, she then learnt that she had developed cancer of the pancreas. Her response following surgery and between courses of chemotherapy was to write an immensely inspiring book, "Singing the Life", on the medical, ethical and psychological problems confronting



families faced with similar inherited challenges.

In 1978, Elizabeth had married the writer and diplomat Ronald Higgins and together they designed and built a beautiful oak-framed house in Herefordshire overlooking the Black Mountains. There, until shortly before her death, they continued to entertain their many friends. Her ability and rare spirit will be sorely missed by all who knew and were inspired by her.

*P. M. Dunn*

page 4

BAPM Newsletter/February 2010



### <編集後記>

みなさまお元気でご活躍のことと存じます。第25回学術講演会(大会長 菅原ますみ先生)の予告を掲載した『ニュースレター』をお届けします。みなさま、奮って演題をお寄せください。今回は受賞講演、研究会発表、第24回学術大会での発表、論文・抄録紹介、書評等と盛りだくさんになりました。特に、国際学会および国際学会誌の抄録をお寄せいただいた会員には心からお礼を申し上げます。今後も会員の皆様のご協力を宜しくお願い申し上げます。編集委員 志村恵(金沢大学) 横山美江(大阪市立大学)